

相談支援係
072-941-3365

ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



幼児教育研修＜特別支援教育・保育ゼミ全体研修①＞

ことばかけのポイント

- ・ 大人が教えたいものに無理に注意を向けさせるのではなく、子どもが興味を向けているものについて、話しかける
はいはいだっかね！！
- ・ 生活の中でのことばかけ
- ・ 子どもの状態や気持ちを、大人が、代わりに言ってあげる＝(代弁)していく
- ・ こどものことばをもう一度おとなが繰り返す



↑ 研修使用資料

- ・ 音声言語、理解言語についての具体例がとても分かりやすく“土台（中身）を充実させましょう”という話が心に刺さった。子どもに丁寧に動作表現を伝える、身振り手振りも付けて言語表現するなど、自身の業務に活かしていく努力をしたいと思います。
- ・ 食事援助の時間は忙しいので、丁寧な対応ができていたか振り返るきっかけになった。一つの食材に対してもいろいろな言葉を使ってコミュニケーションをしながら楽しい食事の時間にして、言葉と食べる力を育んでいきたい。

令和8年6月10日（水）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜特別支援教育・保育ゼミ全体研修①＞を八尾水道センター4階大会議室で行いました。テーマは「乳幼児のことばと食べる力を育む保育者のかかわりについて」で、八尾市立児童発達支援第一センター言語聴覚士 奥野 真理子 さんです。

＜受講者感想＞

- ・ 言語発達のベースは日常生活にあり、情緒、心の安定が重要であることが分かった。話すことよりもまずは聞くこと、理解することが大切だという事を改めて感じた。

幼児教育研修＜ミドルリーダーステージ研修①＞

令和8年6月29日（月）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜ミドルリーダーステージ研修①＞を八尾水道センター4階大会議室で行いました。講師は武庫川女子大学の 西村 真実 准教授で、研修テーマは「担当制保育で実現する！～始める・進める・深めるための具体的な手立て～」です。

＜受講者感想＞

- ・ 研修の中で、一人ひとりの生活のリズム表を見て驚いた。同じクラスの子どもたちが、だいたい同じ時間に座って食事をするのが普通だと思っていた。一人ひとり排泄のタイミングが違えば、お腹がすくタイミングも違うというのは納得できた。
- ・ 子どもの愛着や信頼関係、安心の育みをねらいとして、自分の保育に取り入れていきたい。
- ・ イラストでいろいろな環境の作り方や玩具の種類などを知ったので、手作りの玩具を増やし子どもたちが好きな遊びを選んで遊べるような環境づくりをしていきたい。

幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修①＞

こどもの行動や表現の本質を理解する視点

- なぜ、そのような**行動**をとるのか
 - なぜ、そのようなことを**言う**のか
 - なぜ、このような**表現**をするのか
- ↓
- **発達的理解**が必要になってくる
 - 保育・教育活動は生活保障と発達保障としての大きな役割をもつ

令和8年6月24日（水）午後3時～午後5時に八尾水道センター4階大会議室で幼児教育研修＜特別支援教育・保育ゼミ全体研修①＞を行いました。講師は大阪成蹊大学 高木 玉江 准教授で、研修テーマは「こんな時どうする？～特性を理解し寄り添うということ～」です

←研修使用資料

＜受講者感想＞

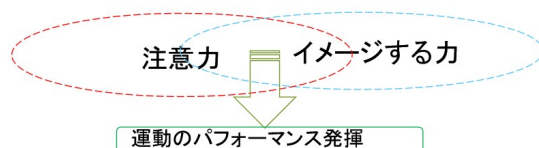
- 一人ひとりが安心してクラス活動に参加し、楽しむことができるよう、子どもに合わせた時間配分や活動内容を柔軟に考え、保育計画を立てていきたい。
- 事例では、諦めずにいろいろな保育者がアプローチしながら、遊びの広がりを見守っていく中で、時間・空間・ルールの柔軟さが大切なのではないかと感じた。チームでの連携の大切さを改めて感じた。
- グループワークでは他園の子どもの様子やクラスの現状などを聞くことができ、とても勉強になった。また、紙に書きだすことで、特性のある子どもの様子を整理することができた。

幼児教育研修＜特別支援教育・保育ゼミ全体研修②＞

③その他の発達について

注意・イメージする力

運動と認知の発達についても繋がりがありますが、特に運動と関連が深いと思われるのは以下の2点です



・注意力とイメージする力の発達は相関している部分があります。

令和8年7月1日（水）午後3時～午後5時に八尾水道センター4階大会議室で幼児教育研修＜特別支援教育・保育ゼミ全体研修②＞を行いました。講師は八尾市立児童発達支援第1センターの作業療法士 岸本 和也 さん で、研修テーマは「運動が苦手な子どもへの支援の視点と方法について」です。

←研修指導資料

＜受講者感想＞

- 運動が苦手な子どもは苦手意識が強いので、そのことをできるだけ意識させずに、“自然に” “少しずつ” 進めながら、“ちょっと頑張ればできる” ことも取り入れ、成功体験が積み重なるように、今後の保育に活かしていきたい。
- 一人ひとりの様子や動きを見て、どんなことが得意でどんなことが苦手なのか整理していきたいと思う。また「直感や違和感を大切にしてください」というアドバイスを伺い、支援に関わる職員同士のコミュニケーションの大切さを再認識した。
- 乳児期において、発達の順序を飛び越えてしまう子どもがいたり、順序良く次の発達へステップアップできない子どももいたりするので、子どもたちの動きを複合的に観察しながら成長を促していけるような支援をしていきたい。

幼児教育研修＜初任ステージ研修①＞

令和8年7月15日（水）午後3時～午後5時に八尾水道センター4階大会議室で幼児教育研修＜初任ステージ①＞を行いました。講師は神戸大学附属小学校・幼稚園の 田中 孝尚 校・園長で、研修テーマは「個の強みを活かした集団づくりとは？～一人ひとりが輝き、いき

いきと過ごすための保育者のかかわりについて～」です。

「環境の構成」と「教師の援助」の一つ一つを言語化する際に
資質・能力を育む意識を高める

時間	予定される 子どもの活動	＊環境の構成及び再構成	◎教師の援助	◇評価の観点
9:00	①園図を見る ・挨拶する ・シールを貼る ・食物の絵表をする ・ウサギやカメの 生活をする ・野果の表画をする	＊1日の生活の見通しをもって過ごすように、生活の流れや時間、することを絵や文字で記しておく。 ◎先の活動を見通して動けるように、体操に合うように早く用意したり、自分で確認したら下座にした。	◎友達と一緒に走るに、様々な場所でも一緒に走って遊ぶ。 ＊走りながら、コーンだったり、コースにりしようとする。ちで考えるため。 ◎思いがぶつかったちを切り替えられんな風に考えていもち、アイデア	◇1日の楽しみなことを話したり、先にしておこうと話をしたりするか ◇丁寧にまったり進み、次の活動へ
	◎好きな遊びをする	◎オリレー ・コースを決めて用意する ・チームや順番を決める ・走って競争する		
	◎オリレー ・コースを決めて用意する ・チームや順番を決める ・走って競争する	◎友達と一緒に、競う。 ＊走りながら、コーンにぶつかったりして、ちを切り替えて、んな風に考えていもち、アイデア		
	◎しっしり取り	＊勝つて嬉しかった。負けて悔しかったという思いが		

教師の意図と行為をセットで記述

意図には、子ども自身がどうなりたいと願っているのか、何を望んでいるのかを踏まえ、どの資質・能力の具体の方向性を意識しているのかを言語化

行為には、思考力、判断力、表現力等を働かせることを支える行為を意識して言語化

＜受講者感想＞

↑ 研修使用資料

・幼児の主体性と教師の意図は、目の前の子どもに合わせてバランスをとっていくことが大事だ

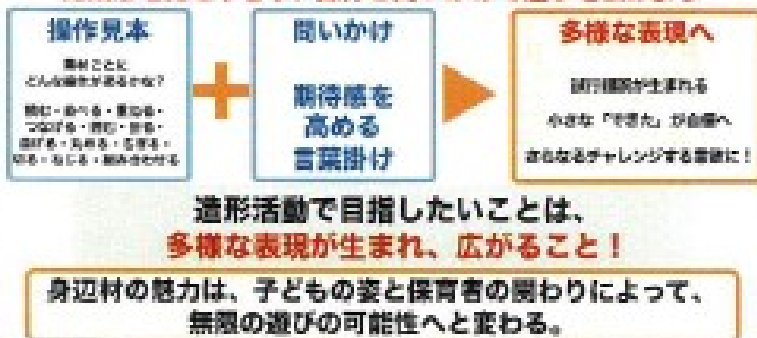
と学んだ。また、保育者の心もちによって、保育の工夫につながっていくということが分かった。

- 大人の言葉がけや価値観は大人にも子どもにも押し付けるものではなく、「そのような発想も面白いよね」と受け止められる自分でいたいと思った。
- 子どものやりたい気持ちを受け止めつつも、いま必要な援助や言葉がけに悩む瞬間が多々ある。周りや自分への配慮を踏まえることで、折り合いをつけることがとても大切だと思った。

幼児教育研修＜保育のための基本研修①＞

最後に！ねらいに応じた操作見本を意識しよう！

完成形を見せず、操作と問いかけて遊びを広げよう



令和8年7月24日（金）午後3時～午後5時に、八尾市立南山本せせらぎこども園遊戯室で幼児教育研修く保育のための基本研修①＞を行いました。講師は大阪大谷大学 山本 将之 准教授で、研修テーマは「子ども体験！いろいろな素材で遊ぼう」～年齢や発達に応じた身近材の活用～です。

研修使用資料

<受講者感想>

- ・素材の魅力を100%引き出すために、足し算の保育ではなく引き算の保育も大切であることを学んだ。
- ・講師の先生からマイナスの言葉を全く聞かなかった。そのことでより楽しい気持ちがあふれるということを実感した。自分の中に「正解」のようなものが知らないうちにできているのを感じた。
- ・ホッチキスやハサミなど、危険だからといって使わせないのではなく、使えたら遊びが楽しいし、広がるということに注目させたい。また、危険なものであるということは指導したうえで、約束事を決めて使わせたい。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は7月から8月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「道徳教育」（明治図書）8月号

・特集 徹底研究 教材「手品師」2026

6ページに「『手品師』で今何を問うのか 道徳科の特質や課題を押さえ、深い学びを」と題して畿央大学 島 恒夫 教授が寄稿されています。『手品師』は今から50年前に『小学校道徳の指導資料とその利用1』に所集された超有名な教材で、島教授は「この教材は、ごまかす自分をどう考えるかという、正直さを支えている考え方をみんなで考え合うこと」が重要であるとされています。「道徳科の授業の『目標』や『ねらい』が先行すべきで、『教材』が先行するものではありません」とも述べておられます。これは『手品師』という道徳教材に対する批判にこたえたものです。確かに本市で採用している東京書籍の道徳の教科書（6年）を見ると、『手品師』は「視点」A（主として自分自身に関すること）の「内容項目」（正直・誠実）に分類されています。島教授は中心発問としては「どうしてごまかさなかったのか」を挙げておられます。具体の授業の中では「男の子のためもあるけど自分のためでもあったんじゃないかな・・・」という意見、とりわけ「自分」という意見に注目すべきであるとされています。この問題意識が子どもたちの中から出るためには「考え合える学級集団」を育てることが必要で、そのことが「考え、議論する道徳」の「実装」につながるとされています。

71ページに「新道徳授業論 道徳科誕生10年！これからを生きる子どもに向き合う」という連載記事の中で東京学芸大学 永田 繁雄 教授は「『どう在りたいか』『どう生きたいか』をつなげる」と題して寄稿されています。ここでもテーマは『手品師』です。永田教授は自身の経験談を二つ述べられています。一つ目は小学校の教員をされていた頃、初めての5年担任で『手品師』の授業を行った時のことです。小さいころからピアノ演奏を学び、ピアニストになるという夢を持った児童に対して「本当に？」という問い返しをして怒らせてしまった経験。もう一つは15年ほど前、『手品師』を使った模擬授業を参観されたとき、手品師の生き方に深く感動した生徒役の先生の発言です。永田教授はこれらの『手品師』にまつわるエピソードを「あり方」と「生き方」で説明されています。具体的に区分モデルを示されています。永田教授は「『どう在りたいか』は自己存在の土台・基礎であり、礎（いしずえ）となっている。その上に、『どう生きたいか』の幹が伸び、基礎となり柱となる。そして、本来持つ価値観が自己実現に向かう力として人生を歩む力にもなる」と述べられています。この「あり方」論は、現在の学習指導要領では学校段階ごとに小学校：「自己の生き方についての考えを深める」、中学校：「人間としての生き方についての考えを深める」、

める」、高等学校：「人間としての在り方生き方についての考えを深める」と示されているとのことです。

私は永田教授の記事を拝読して、『青空』（THE BLUE HEARTS）という歌の歌詞を思い出しました。「誠実」とは何を意味するのかについて改めて考えさせられました。誠実であるためには自分の生き方を見つめていなくてはならない、ということでしょうか。

（葭仲）

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）8月号

- ・特集 改定に向けた検討事項と、今、大切にしたい取組⑤

外国語活動・外国語

特別活動

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）8月号

- ・特集 学習指導要領改訂に向けて
～各教科等別ワーキンググループにおける審議状況⑤～

「特別支援教育」（文部科学省編集・東洋館出版社）令和8年夏 No.102

- ・特集 小・中・高等学校における特別支援教育の充実

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）8月号

- ・特集 豊かな放課後・土日休日・夏休み！

教育科学「国語教育」（明治図書）8月号

- ・特集 国語教材 徹底ビジュアル解剖

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）8月号

- ・第1特集 「図形」における核となる概念を育む数学的活動
- ・第2特集 子どもの個性・多様性を生かす算数の授業づくり ～個別最適な学び～

教育科学「社会科教育」（明治図書）8月号

- ・特集 学びをつなぐ！導入と接続を意識した系統的な授業デザイン

4ページの「普通の教師が生きる学校 モンスター・ペアレント論を超えて」という連載（第703回）で大阪大学の 小野田 正利 名誉教授が「保護者コーナーにセコンドとして生成AIが付きつつある！？」と題して寄稿されています。60年前から比べると、学校に対する保護者から学校への要望は、個人から集団へと変化してきたそうです。20年ぐらい前からはネット情報やSNS情報が増えてきたそうです。さらに、10年ぐらい前からは弁護士や司法書士などに相談する例が増えてきたそうです。小野田教授はそのことが問題だと仰っているわけではありません。この2年ほどで、AIに相談して学校に物申す保護者が増えてきたとのことです。その特徴は「書面でのやり取り以外は拒否し、生成AIで学校の対応を批判し、それに対して回答を求める」とのことです。「頼れる用心棒」が「扇動する化け物」と化しているのかもしれない、という指摘で締めくくられています。道具であるAIが人の行動を支配するというのは、ある意味「シンギュラリティ（技術的特異点）」なのかもしれません。

（葭仲）

19ページの「教育法規あ・ら・か・る・と」では淑徳大学の 坂田 仰（たかし）教授が「法を手掛かりに学校を守る」と題して寄稿されています。今の学校教育は「法化」しているとのこと。かつては「信頼」や「熱意」などを前提に「予定調和」的な関係性が築かれていましたが、それらはすでに崩壊しているとのこと。この時代、「法を手掛かりに学校を守るという視点」が必要とのこと。これを「スクール・コンプライアンス」と呼ぶそうです。コンプライアンス（法令順守）は教育の自由・裁量を縛り、教育実践を委縮させると考えられがちですが、スクール・コンプライアンスは、「法や手続きを用いて教員の専門性と裁量を社会から守るための『盾』あるいは『武器』としての役割を果たすということです。ここで、求められるのは「学校という組織における「手続き的正義（Procedural Justice）」を徹底させること」です。これは「どのような手順で（組織の意思）決定に至ったか」ということの公正さを示すことです。いじめ問題、生徒の懲戒、危機管理等々様々な場面が考えられます。そう言われると、最近起こった事件（修学旅行や部活の遠征における事故）が想起されます。スクール・コンプライアンスが徹底されていなくて問題が生じた場合、「管理職の監督義務の懈怠や、チェックシステムが機能していなかったという組織的な瑕疵」が問われることとなります。ここで気になるのは、「手続き」の有効性だと思います。現実には書類の稟議や会議が行われますが、やれば良いというものでもないと思います。それぞれが自分事として考え、忖度なしで、忌憚のない意見が言い合える環境が必要ではないでしょうか。（葭仲）

14ページの「遊びを深める視点を ●幼児教育WGまとめ案」では中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育ワーキンググループ（WG）のまとめ案が了承されたとの記事が掲載されています。ここでは「遊びの深まり」の実現が掲げられています。幼稚園教諭や保育士らが、遊びを観察し、子どもを理解して環境を整えたり援助の仕方を工夫したりすることをめざす、というものです。指導事項については、外で遊ぶ機会が減少したことや、未就園児が家族以外と関わる経験が乏しい現状を背景として、「多様な動きを伴う体験」によって身体感覚を養うことや、「他者と関わり協同する力」「言葉を用いて考える力の基礎」の育成といった観点での見直しが提言されています。（葭仲）

20ページに「『ギユられない』ために」という記事がありました。「ギユられる」とは「シンギュラリティーにやられる」の省略形だそうです。シンギュラリティーは「技術的特異点」と訳され、最近には主に人工知能（AI）が人間の知能を追い抜くことを指すとのこと。東大生の国家公務員採用総合職試験受験者が増加しているのは、東大生は国家公務員を「ギユられない」仕事と判断しているのではないかとのことです。これは日本だけのことでなく、世界でAIに仕事を奪われるという状況が生じているらしいのです。パソコン上でできる仕事はAIに奪われかねません。そういう意味では「（キャリア）官僚」の仕事は、政治家対応が含まれていて、簡単には「ギユられ」そうではありません。つまり「対話」や「説得」はAIが苦手とすると事のように。近代の学校教育が有する「産業革命で生まれた産業社会のための人材を育てる場」、「企画品を大量生産する場」というような側面が、AIの登場であぶりだされているのかもしれない。次期学習指導要領では「ギユられ」ないような教育が行われるようになるといいですね。（葭仲）

1 ページに「保護者から感じる疑問」と題して教育ジャーナリストの 朝比奈 なお 氏が寄稿されています。前段では、奨学金制度及びその周辺の情報周知が不十分であること、後段では、そもそも AI 利用が広まりつつある時代にあって、世の中の変化が保護者に周知されているのかということについて述べられています。AI 利用の先進国では「事務や管理等の職種及び専門職の一部の雇用が急激に減少」しているとのこと、逆に「AI への代替えが難しい分野の技術職が高賃金を得る『ブルーカラービリオネア』」という現象が出だしているとのこと。つまり「とにかく大学進学」ではなくなりつつあり、保護者や生徒によく知ってもらう必要があるようです。（葭仲）

1 ページに「『考える葦』とAI」と題して前所沢市教育長の 中島 秀行 氏が寄稿されています。AI が広く利用されるようになり、「何でも AI に相談する」という若者が増えているとのこと。学校の先生の中にも「定期テストの問題作成や採点」等において AI の利用が見られるそうです。「教員も AI に代替される職業」となってしまうともいわれています。「考える葦」はいつの間にか「考えない葦」になってしまったのでしょうか。ちなみに、中島氏によると「考えない葦」の行く末は「ただ刈られるだけ」の存在になってしまうのではないかとのことです。（葭仲）

まとめ

AI に関する記事をいくつか紹介させていただきました。学習指導要領の改訂も大切なのですが、否応なく我々の社会生活に浸透してくる AI と、どのように付き合っていくのかということは、教育においても喫緊の課題となっているようです。ここまで来たら AI 完全拒否論は論外かもしれません。今考えなくてはならないのは AI と人間との棲み分けではないでしょうか。AI に何をさせて、人間は何をするのかを考えなくてはなりません。今が考え時ではないでしょうか。早くしないと「考える」という行為そのものが AI に奪われてしまう可能性すらあります。「主体的に考える」というのは「自分で AI に聞く」ということではないはずです。何年か後、振り返った時に、「あの時考えてよかった」となるのか、「あの時考えなかったために・・・」となるのかは今にかかっているのではないのでしょうか。（葭仲）